

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0991300260		
法人名	医療法人社団 湘風会		
事業所名	グループホームミカーサ		
所在地	栃木県那須塩原市鍋掛1087-270		
自己評価作成日	令和3年1月4日	評価結果市町村受理日	令和3年3月16日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人アスク		
所在地	栃木県那須塩原市松浦町118-189		
訪問調査日	令和3年2月17日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

事業所の理念である「ゆっくり」「一緒に」「楽しみながら」に基づき一人一人の意向をくみ取って安心して生活を送っていただけるよう心がけています。また、個性や自尊心を尊重した支援に努めています。今後もより一層地域の方との交流を深め地域密着型サービスの特徴を生かした取り組みを行っていきたくを思います。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

「ゆっくり」「一緒に」「楽しみながら」の理念の実践として、入浴、排泄、食事の場面では利用者の残存能力を活かしながら個々のペースに合わせてゆっくり見守りながら支援している。季節の行事や貼り絵の制作では職員が利用者の喜ぶ姿を思い描きながら企画や準備をした上で、一緒に楽しんでいる。2ヶ月毎に身体拘束等の適正化のための学習会を開催し、全員がレポートを提出し、そのまとめを運営推進会議でも報告している。身体拘束等の適正化のための対策の一連の流れは職員の意識付けと支援内容の確認の流れができた前向きに捉えている。職員の大きな声で利用者の動きが止まったら、それはスピーチロックであると認識し、その都度管理者も職員も注意を払っている。薬による拘束についても学習し、不穏な状態の利用者に対しても薬に頼ること無く、介護の力で解決するなど身体拘束をしないケアの実践に積極的に取り組んでいる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
			実践状況			
I. 理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている		「ゆっくり」「一緒に」「楽しみながら」の理念を元に一人一人のペースに合わせて支援している。	事業所の理念は職員の目につくキッチンに掲示している。入浴、排泄、食事の場面では利用者の残存能力を活かしながら個々のペースに合わせてゆっくり見守っている。季節の行事や貼り絵の制作では職員が利用者の喜ぶ姿を思い描きながら企画や準備をした上で、一緒に楽しんでいる。管理者は「ゆっくり」「一緒に」「楽しみながら」の理念が実践できているか、定例会議や日常生活支援の場で確認している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している		地域での行事には、積極的に参加していくようにしている。コロナの影響で本年度は立ち寄りカフェの方は中止になっており行事等も現在参加を控えている。	事業者は地域の人自主運営している「立ち寄りカフェ」の場所を提供している。そこでは体操や昔話などをしたりお茶を飲んだり地域の高齢者のいこいの場となっている。また、地元の中学校の社会見学やマイチャレンジ(職業体験)を受け入れていた。現在、コロナ禍で地域との交流は難しくなっているが、地元の活動や地域の住民との交流に積極的に取り組む考えている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている		現在コロナの影響もあり、地域と情報を共有できる機会がなかなか持っていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている		施設の運営状況や利用者の生活の様子は、資料等を報告している。委員の方々から意見をいただいて施設の運営に生かしていけるよう努めている。	身体拘束適正化委員会を兼ねている運営推進会議は、昨年から新型コロナウイルス感染防止のため、資料を配布し、書面での意見提出としている。委員である自治会長は地域の行事や防災訓練の情報などを提供し、地域と事業所とのパイプ役となっている。また、身体拘束適正化委員会では、事業所で開催される身体拘束に関わる研修内容を共有し、管理者は職員の「拘束をしない」取組を会議で報告し委員から意見をもらっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる		運営推進会議で市町村担当の方から意見をいただいたり、行政の情報等について詳しく説明を受け、必要時に連絡して相談をしている。	運営推進会議のメンバーである市の担当者や地域包括支援センター職員からは情報提供を受け、事業所からは事故報告や運営状況、日常の利用者の様子等を伝え、情報を共有して、良好な関係を作り連携を図っている。また、新しく入居する利用者に関しての相談に乗ってもらうこともある。	

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況	実践状況	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	運営推進会議にて身体拘束の適正化について検討を行っている。施設として身体拘束をしないケアに努めており、勉強会を通して学び支援に生かしている。	2か月毎に身体拘束に関わる研修を実施し職員全員がレポートを書いて共通認識を図っている。不穏な行動をする利用者には安易に薬に頼ることなく利用者が引き起こす症状の原因を紐解きながら支援したり、帰宅願望がある利用者には気持ちに寄り添いながら見守って支援している。介護の力で拘束のないケアを実践し、安全に配慮しながら尊厳ある暮らしの支援に努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	事業所で勉強会を行って、普段の業務でも入浴時等で身体に傷やあざがないか確認している。また、利用者の心身の状況を注意して観察している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	事業所で勉強会を行い、職員間で理解を深めていくよう努めている。適切に活用していただけるよう関係者との連携を意識している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前に契約を行い家族や本人へ十分に説明するようにしている。不安や疑問点等は、その都度説明して理解納得していただけるよう努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関に意見箱を設置している。家族面会時には、利用者の状況を報告して要望等も聞くように努めている。また、利用者の要望等は居室にて傾聴を行っている。	家族が訪れた時や電話連絡時に利用者の生活の様子や体調を伝え、家族から出された意見や要望は、定例会やカンファレンスで協議している。家族からはコロナ禍で面会が難しくなっているのでリモート面会ができるようにしてほしいと要望があり検討中である。職員は、利用者と一対一になれる入浴や居室の掃除の時にゆっくりと利用者の気持ちを聞き取るようにしているほか、利用者の表情から意向等を読み取るように心掛けている。	

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況	実践状況	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の定例会議や申し送り等で意見や提案を聞いて、業務の改善や行事について前向きに実践していけるようにしている。	管理者は年2回個別に職員と話し合う機会を設けているほか、毎日の申し送りや定例会議で日々の生活の中で気付いたことを聞いている。日常の利用者との関わりの中で生まれる職員の気付きやアイデアを運営に取り入れるように心掛けている。最近では新型コロナ感染防止のため利用者と一緒に食事をするのを止めて職員は休憩時間を使って別々に食事をするに変更している。行事計画では職員の活発な意見が出されて実践されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の状況により勤務形態を配慮している。各自が向上心を持ってやりがいを感じられるように努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	事業所内で毎月、勉強会を実施している。また、外部研修も行い交流の機会も作り各自スキルアップしていけるようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	外部研修や運営推進委員会で地域包括支援センターと情報交換するなどしている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	環境の変化によって生じる不安や困っていることを本人の気持ちになって考え要望を傾聴して安心して生活できるように対応している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の困っていること要望等を聞き入れ、何でも相談できる雰囲気作りを大切にして関係づくりに努めるようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前に情報収集を行い家族の意向と本人の状況を見極め各職種で連携して支援して行ける体制づくりに努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	普段の生活で利用者の状況に合わせて出来ることを職員と一緒に行って共に生活する。関係づくりを意識している。			
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人と家族の関係に配慮しながらお互いの意見を尊重して関係性が円滑にいくよう努めている。今後も継続して家族との時間を持てるように努めていく。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族や知人の面会時には、ゆっくり話が出来るようにセカンドリビングや居室に案内している。また、定期的に外泊してり外出して馴染み人との交流をしている。現在はコロナ禍のため控えていただいている。	毎月自宅に外泊したり、家族と外食や買い物に出かける利用者がいたが、コロナ禍でかかりつけ医の受診以外は面会や外出を自粛してもらっている。人間関係や地域の人たちとの関わりが閉塞的になりがちだが、つながりが途絶えないように家族との電話や手紙での連絡を取り持ち、少しでも継続的な交流ができるように努めている。地域の訪問美容師にはコロナ禍であっても継続して来所してもらっている。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	行事やレクリエーションを通して利用者同士の関わり合いを支援している。孤立しない様職員が寄り添うよう努めている。			
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	家族に会った際は、近況や様子を聞いていつでの相談していただけるように伝えている。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者一人一人の思い、意向を尊重し本人の話を傾聴するようにしている。困難な場合は、以前の生活歴等から導き出すよう努めている。	職員は家族からの情報や利用者との会話をすることで利用者の意向や思いを把握するように努めている。言葉での表現ができない場合はその人の表情や様子を観察して利用者の気持ちを推し量るようにしている。クリスマス会では元音楽の先生だった利用者が利用者で構成する聖歌隊の指導と独唱を披露して、利用者職員共に感動する場面が作られている。貼り絵を得意とする人がいて、利用者職員と一緒に作成する季節を表した貼り絵の大作が出来上がっている。利用者ができることや得意なことをみんなに広げて行い楽しんでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人らしさを大切にこれまでの生活環境に近づけるよう支援している。本人家族の意見を伺いサービス利用の経過把握に努めている。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	記録や申し送り等で情報を共有できるようにしている。本人の残存能力を見極め無理なく出来ることを行っている。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	面談時等に本人、家族の希望や日々の状態の変化、職員の意見も取り入れ見直し変更を行っている。	計画作成担当者は、利用者や家族から思いや要望を聞き取り、担当職員からの情報も加えアセスメントを行い、ニーズに応じたサービス内容を検討して介護計画を作成している。モニタリングは毎月開催される定例会議で利用者一人ひとりの生活状況、身体状況の変化や様子を職員から情報を収集してまとめている。病院への入退院など状態や状況が変化した際にはその時の利用者のニーズに合わせて計画の見直しを行っている。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録や申し送り、連絡ノート定例会議棟で情報を共有し実践し介護計画の見直しに反映している。			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人、家族に希望に添って、訪問マッサージ、訪問歯科等を活用している。買い物支援や外食等も取り入れ柔軟な対応に努めている。			
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の公民館祭り等で貼り絵等の作品を出展したり、中学生ボランティアで来所され交流を図り利用者の楽しみになっている。			

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況	実践状況	
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	一人一人の希望に添って適切に受診を行っている。家族利用所の状況に応じて訪問診療への切り替えや必要に応じて管理者ケアマネが受診に同行している。	かかりつけ医の受診は家族の介助で行っているが、老々介護や独居で家族による通院介助が困難な人は、在宅診療所からの訪問診療に切り替えている。訪問歯科や訪問マッサージを受ける利用者もいる。転倒などの緊急時や家族では利用者の状況が伝えられない場合は、必要に応じ管理者が受診に同行している。家族から口頭で伝えられた受診後の情報は申し送りノートで職員に伝え、全職員のサインが記されたことで、共有したことを確認している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日常の変化や気付いて事は変節の小規模多機能の看護師に報告してり訪問診療の医師や看護師に相談して対応している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者の入院時には、家族や医師、看護師と情報交換、相談に努め、ソーシャルワーカーと連絡を取りあい状況の変化に応じて連携できるように備えている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合に備えて事前に他施設への申し込みや事業所で対応できることを説明するようにしている。終末期のケアについて今後話し合いを行っていく。	現在は入所時に重度化した場合や終末期に事業所で対応できること、できないことを伝え、医療的な行為が必要な場合は対応できる施設への申込みを支援する方針を伝えている。ただし、訪問診療を専門とする在宅診療所の利用ができる等医療的な条件が整ってきたので、今後は重度化や終末期への支援に向けて具体的に検討する時期となっている。	今後は事業所として、重度化や終末期への支援に向けて、まず職員の意向を確認して、職員の理解を得ていきながら看取りに対する不安への対応を考え、看取りの考え方をまとめ、ターミナルケアに向けた教育を行い、緊急時のマニュアル、指針を策定し、その上で家族へ説明していくことが期待される。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応についての勉強会を行っている。様々な状況を想定して訓練を繰り返し行い実践力を高めるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況	実践状況	
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回昼間と夜間想定での避難訓練を行っている。地域の防災訓練にも定期的に参加して協力体制を整えるようにしている。	年2回の消防訓練は、消防訓練計画書を策定し、出火状況や場所等具体的に内容を決め、夜間と日中を想定して訓練している。今年はコロナ禍で消防署より立ち会いはないと言われたが、自主的に施設のみで訓練を行った。併設する小規模多機能型居宅介護施設と合同で訓練を行っており、コロナ禍以前は近隣住民の参加もあった。運営推進会議委員の自治会長からの情報で、地域の防災訓練に管理者が参加することもある。	運営推進会議で自治会長から、地域の自主防災訓練計画や地区の小中学校の防災計画とミカーサ防災避難計画との連携を働きかけられているので、この機会を活かして更なる災害対策が図られることを期待する。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりの人格を尊重し、プライバシーの確保に配慮した言葉使いや対応をしている。	一人ひとりの人格を尊重する中で、特に言葉での意思疎通の難しい人に対しては表情や全身での反応を見逃さないよう心がけている。また、日常的なケアの場面で利用者の尊厳を損ねない言葉かけに管理者は注意を払い、申し送りのノートで伝え、法人としても職員研修で徹底を図っている。利用者のプライバシーに特に配慮する場面で、入浴での対応、排泄介助時の声掛け、誘導、ドアを閉めることなど基本的な支援方法を守っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者一人一人に意見を聞いたり居室などリラックスできる場所で会話をして思いや希望を傾聴するように努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者一人一人のペースを大切にし、本人と会話しながら希望に添って自由時間を設けたり、余暇活動をしたり出来るように支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	定期的に出張美容室を取り入れたり、日常の中で身だしなみや本人の希望に添った服装選びを一緒に支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者と職員と一緒に調理する機会を設け、野菜を切ったり、食器拭き等をしていただいている。一人一人の好みに合ったメニューを作成して食事が楽しくなるよう努めている。	朝食と夕食は職員が調理するが、昼食のおかずは配食業者へ外注する日と職員が調理する日がある。利用者は職員が調理する日や行事食の日、おやつ作りの時には一緒に調理している。ほとんどの人が何かしらできるので、できることを探して一緒に行っている。特にホットプレートを使った料理の時には、理念でも謳っている「一緒に楽しみながら」の実践となっている。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量、水分量はチェック表を用いて記入している。利用者の状態に応じた量や水分を本人の話も聞いて提供している。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に口腔ケアを行い、口腔内の観察を行っている。介助が必要な方は一緒に行い口腔内の清潔保持に努めている。また、訪問歯科を本人、家族の希望も聞いて取り入れている。			
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄表を用いて一人一人の排泄パターンの把握に努めている。個人のペースに合わせて、トイレでの排泄の声掛け見守り介助を行っている。	排泄の自立支援では、「自分でできることはやってみよう、それをどう見守るか、待ってられるか」であるとして、職員で共有・統一を図り、定例会議で確認している。具体的には「尿意・便意をしっかり保つ」「そのタイミングを支援できるか」を理解して、職員は実践している。「最初は定時声掛け、次にタイミングで声掛け、成功は利用者の自信に繋がる」と支援の目標を共有しながら段階的なアプローチをしている。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	朝食前の水分補給や牛乳の摂取を促している体操や歩行練習等もレクリエーションに取り入れている。トイレの際腹部マッサージを行い自力排便を促している。			
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴日の振り分けは基本的に決まっているが、本人の訴えや体調に応じて臨機応変に対応している。一対一でゆっくり職員と話が出来る機会となっている。	蓄暖構造の建物で暖かく、更に脱衣所・浴室にはエアコンが設置されている。三方向介助が可能な浴槽で、浴槽内には手すりが付き、入浴は一対一で職員とゆっくり話せる楽しい機会となっている。職員は自分のペースで入浴する利用者を「見守り、待てるか」が、理念である「ゆっくり」を実践できる大切な支援と認識している。		

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者一人一人のペースに応じて休んで頂いている。日中はなるべく体操等で体を動かす機会を取り夜間安眠できるよう支援している。また、居室の温度や衣類、寝具等の調整に気を配っている。			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	利用者一人一人の処方箋にて薬の内容や副作用等について理解している内服時の管理はダブルチェックしている。服薬時は付き添い内服できたか確認している。			
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者の出来ること、楽しめることをして過ごせるよう支援している。貼り絵や畑仕事、調理、合唱等を楽しませている。また、洗濯物たたみや食器拭き等やっていたき役割分担している。			
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	日中散歩に出掛けたり、希望により買い物支援を行っている。季節の花を観にドライブしたり、外食に出掛けるようにして気分転換している。定期的に自宅へ外泊に出掛ける方もいる。	コロナ禍でも、職員の手の空いた午後に車椅子の人も含め全員が散歩に行っている。今まで職員と出かけていた買い物、季節の行事のさくらやあじさいのお花見、紅葉狩り、初詣などは自粛し、家族との外出も通院だけに限定されている。その様な中、お花見や紅葉時期にはドライブだけでもと工夫して外出している。また、初詣は、併設の小規模多機能居宅介護施設の玄関に設置された職員手作りの鳥居にお参りし、おみくじを引くなどの楽しみもあり、併設の施設職員の協力も得て支援している。		
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金の所持したり使えるように支援している	一人一人小遣いを預かっており外出や本人希望で日用品の買い物等に使えるように支援している。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があればこちらで相手先に連絡して本人と話せるようにしている。家族や友人に手紙のやり取りが出来るよう支援している。			

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況	実践状況	
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用空間や居室は毎朝掃除を行い清潔に日々気持ち良く生活できるように努めている。季節の花や、季節ごとの貼り絵やリビングの飾り付けをして季節感を取り入れている。	玄関に入ると訪問理容にも使える談話スペースがあり、食堂と浴室・洗濯室は坪庭を挟む回廊でつながって明るく、坪庭のモミジと実をつけた金柑の植栽は季節を感じさせる。廊下が広く、居室の配置は直線的でなく変化がある造りになっている。ただ、居室がキッチンからは死角となるため、職員は夜間の見守り時には居室近くの畳のスペースを利用している。居室の近くのセカンドリビングは利用者が手紙を書いたり、利用者同士で過ごす時など、思い思いに利用している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	畳スペースやセカンドリビングを活用し来客時や気の合った利用者同士でゆっくり過ごせるよう配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人や家族と相談しながら、自宅から使い慣れたもの、思い入れのあるものを持参して頂き、居心地良く過ごせるように配慮している。	居室には車椅子対応の洗面台とエアコン、ベッドが設置され、利用者によっては安全に配慮して低床ベッドが使われている。利用者は使い慣れた家具や新たに家族が用意してくれたものを使いやすいように配置し、テレビも居室で観ることができるように設置している人もいる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物全体はバリアフリーになっていて自由に歩いても安全になっている。足元灯も活用して夜間も安全に配慮している。カーテンの開閉の手伝いは自主的に行って頂いている。		